

浄瑠璃・世話物

「心中宵庚申」

◎初演 享保七（一七二二年）四月二十二日 竹本座

「水の中火の中でも先の世まであなたと夫婦に……」

あらすじ

上之巻

（坂部郷左衛門屋敷）

武家の出ながら五歳の時、大坂の八百屋に

養子に行った半兵衛は、亡父の十七年忌の墓まいりのため、実家のある浜松に戻る。ちようど弟小七郎が仕える坂部家に、殿様のお成りがあるので、居合わせた半兵衛は、機転のきいた料理を作るなど、立派に大役を果たし男を上げる。

中之巻

（上田村島田平右衛門内）半兵衛の妻千世は、

夫の留守中に、姑から家を出され実家に帰っていた。

半兵衛は浜松からの帰りに妻の実家に立ち寄り、千世が来ていることに驚く。はじめは半兵衛の不義理

を責めていた千世の姉おかると父平右衛門だったが、やがて「いっしょに行こう。たとえ死んでも体も戻



さない。未来まで夫婦」と家に帰っていく二人を、水盃をかわして見送る。

下之巻（八百屋伊右衛門内〜八百屋半兵衛女房お千世道行〜生玉大仏勸進所）

八百屋にひとり戻った半兵衛は、姑に「今のままでは、姑に悪名をきせることになる。一度千世を家に入れてから、自分で離縁する」といい、納得させる。半兵衛は家に戻った千世に事情を伝え、姑の目の前で再度家から出す。その後、家人の目を盗み、家を抜け出した半兵衛は、千世と手をとって最期の道行に出る。

見どころ

最晩年、七十歳の近松が書き上げた、最後の世話浄瑠璃です。享保七年、大坂で実際にあった夫婦心中を題材にしました。離縁しないと約束した義父への義理と、養い親（姑）への孝との板ばさみから、死を選ぶほかなかった二人の悲劇が胸を打ちます。その姑は敵役とはいえ、寺参りに熱中している夫の代わりに、一家の切り盛りをするなど、男勝りの働き者としても描かれています。なぜ彼女がお千世を嫌うのか、作者はその理由を書いていませんが、そのことがかえって、話を単純化することなく、逆に姑の人物像に現実味を与えているとも言えるでしょう。中之巻「上田村」の場面は、娘に対する、老いた父親の切々たる感情が見事に描かれており、見る者の心をつつ場面です。